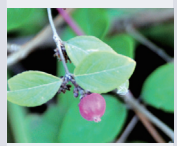
月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2016年12月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊28年目
創刊 1989年 Nr. 329

Carl Moser Bretonisches Kind 1904 Farbholzschnitt; Japanpapier Albertina, Wien

アルベルティーナ美術館 企画展『一九〇〇年頃のウィーンにおけるカラー木版画』にて1月15日まで展示

杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 62



筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院は、グローバルな原子力危機分野において国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士一貫学位プログラムである。文部科学省の支援により平成二三年度から開始した本プログラムは、「博士課程教育リーディングプログラム」と呼ばれ、文理両分野にまたがり全国三十三大学で六一プログラムが進行中である。東工大だけで当教育院を含む四プログラムを実施中である。全プログラムのなかで原子力関係は当教育院と広島大の二件である。十一月十日～十二日にかけて、全プログラムの関係者と学生、産業界、研究機関、国際機関、国・地方行政機関など計約九百名を一堂に集めたフォーラムがヒルトン東京お台場で開催された。当教育院からは、院長を始め筆者を含む教職員四名と博士課程学生三名の計七名が参加した。

本プログラムでは来春に第一期生の博士が社会に飛び立つことから、会場では修了生の出口（就職）に焦点を当て、そのため、主催は幹事校である慶応大学であるが、経団連が共催となり、産業界からの招待講演、産学ラウンドテーブル、学生ラウンドテーブル、意見交換会、文部科学省説明会、学生討論会、出口討論分科会などが開催された。意見交換会では、就職を希望する博士学生たちが、プログラム毎に制作したポスターに基づき、企業等の経営層・人事担当者に対して、各大学のプログラムの特徴や自分が行っている研究や活動を説明し、意見交換を通じて各学生が企業等にアピールする場が設けられた。東工大のポスターにも産業界、国行政機関などから多数訪問があり、学生たちは堂々と説明して質問に答えていた。企業等からの博士学生へのニーズが拡大しており、就職した博士学生が着実に成長していることを実感した。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の灯りについて述べてみたい。ウィーンの灯りと言えば、何といってもクリスマスが近づいた頃のグラーベン通りに吊り下げられるシャンデリアのようなカテナリー照明であろう。華やかさでクリスマスの雰囲気を一段と盛り上げている。室内では、楽友協会ホール、国立オペラ座などに飾られているロブマイヤー社のシャンデリアが美しい。同社は一八一三年にウィーンで創業し、その後、ハプスブルク家御用達の称号を得て、今や六代目の老舗は、創業当時からの伝統を守り、ガラス工芸の魅力を現代に伝えている。高度な熟練技術から生み出されるグラスなどを含むガラス製品は、世界から高く評価されており、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場のシャンデリアも同社のものとして有名である。

一方、京都の灯りとしては、祇園祭の宵山で並ぶ煌びやかな提灯など、祭には提灯が付きものである。一七三〇に京都で創業した高橋提燈は、京都府長岡京市の柳谷観音の大提灯をはじめ、神社や祭での神事用提灯、寺院での仏事用提灯、弓張提灯、看板装飾提灯からお盆・葬儀用提灯まで取りそろえている。浅草寺雷門の大提灯も同社が製造している。他にも、和傘の製造・販売で二六九〇年に創業した辻倉は、大正期に提灯の製造・販売も始め、江戸時代末期に創業した美濃利柳瀬商店ともども、提灯以外にも近年は和紙を利用したインテリアとしてのおしゃれな室内灯が外国人にも人気である。両市の灯りは、伝統を維持しつつも改良を重ね、各種イベントを華やかに彩るとともに、日常生活にも豊かに役立てられていることが共通している。

余談であるが、筆者がウィーン赴任時にはグラーベン通りの照明や楽友協会ホールなどのシャンデリアをよく見て楽しんだ。京都では宵山、祇園、先斗町などで提灯を見ては懐かしい気分になった。両市の灯りを紹介できた幸運に感謝しつつ、グラーベン通りのスケッチを掲載させていただく。

■ 杉本純 東工大特任教授 前京大教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■